

## 日本語の読点の打ち方に関する考察

## —性別と年齢別を中心に—

Insertions of Commas in Japanese

-Focus on Sex and Age-

Yuniarsih

ジャカルタ国立大学日本語講師

龍谷大学文学研究科日本語日本文学専攻博士課程

## Abstrak

Tanda baca, dalam hal ini tanda koma, sangatlah penting untuk memudahkan pembaca dalam membaca dan memahami arti kalimat. Penelitian ini mengujicobakan 3 kalimat yang didalamnya ada unsur ABC (Teori struktur bahasa Minami Fujio) kepada 202 orang Jepang yang terdiri dari 99 orang laki-laki dan 103 orang perempuan untuk melihat kecenderungan orang Jepang dalam pembubuhan tanda koma, ada atau tidaknya perbedaan antara laki-laki dan perempuan dalam pembubuhan tanda koma, dan ada atau tidaknya perbedaan usia dalam pembubuhan tanda koma. Berdasarkan hasil penelitian ini, kecenderungan orang Jepang membubuhi tanda koma pada *setsuzokujoshi*, terutama setelah *setsuzokujoshi* “ga”(unsur C), jika diperlukan setelah *setsuzokujoshi* “node”(unsur B), dan jika diperlukan lagi setelah *setsuzokujoshi* “nagara”(unsur A). Penelitian ini membuktikan juga ada perbedaan antara jumlah tanda koma dengan jenis kelamin dan usia. Ada perbedaan antara letak tanda koma dengan usia, namun tidak ada perbedaan antara letak tanda koma dengan jenis kelamin.

**Kata Kunci:** Pembubuhan tanda koma, Struktur Bahasa, Teori Minami Fujio

## 1. はじめに

日本語教育に参考になる読点の研究は岩畑（1999）、小林（2004）、深瀬（2004）、山口（2005）等のものがある。

岩畑（1999）・小林（2004）は、独立性が低い従属句（A類～ながら等）の後には、読点が打たれにくく、独立性が高い従属句（B類～ので等、C類～が/けど等）の後には、読点が打たれやすいという。

山口（2005）は、複雑な場合、まずC類に読点を先行にし、次にB類に読点を打つ。読点の打ち方は順番で言うと、C類→B類→A類であると述べている。

以上の研究したものは文の構造（文法）から見た読点の研究である。読点の打

ち方は文の構造との間に関係があり、文の構造の関係を示すだけでなく、読者に読みやすくする、文の意味を理解しやすくする、強調を示す、息継ぎをするために打つなどの側面がある。そのため、日本語においては読点の打ち方に揺れがあり、なかなか統一できない原因になっている。

日本語の読点の打ち方は個人差があることは確かであるが、日本語教育において、母語でない外国人のための一つの指針と例示が必要であることも確かである。

文学作品を調査結果(表1参照)では、子供向けの文学作品では読点数が多く見られる。書き手が読み手に読みやすくする、文の意味を理解しやすくするため、読み手の年齢によって読点の打ち方が異なると考えられる。

番号	作品名	文数	読点数	1文あたりの読点数	条件表現の数	1文あたりの条件表現の数
1	蜘蛛の糸	61	136	2, 23	21	0, 34
2	魔術	164	329	2, 01	52	0, 32
3	鼻	162	264	1, 63	30	0, 19
4	杜子春	252	468	1, 86	61	0, 24
5	走れメロス	472	555	1, 18	29	0, 06
6	注文の多い料理店	224	204	0, 91	23	0, 1
7	銀河鉄道の夜	1. 135	988	0, 87	136	0, 12
8	よだかの星	207	152	0, 73	15	0, 07
9	やまなし	114	79	0, 69	7	0, 06
10	ごん狐	174	285	1, 64	18	0, 1
合計		2. 965	3. 460	1, 17	392	0, 13

※ 「文数」は文末に句点<。>、終わり鉤括弧<」>、感嘆符<!>、疑問符<?>、丸括弧< () >のある

そこで、本研究では、性別および年齢別によって、読点の打ち方にどのような特徴が見られるかということについて、3つの課題文を取り上げて検討することとする。

## 2. 先行研究

### 2.1 南不二男の「文の構造の理論」(1974)

南(1974)は従属句の分類を用いている。南は従属句を以下の3つに分類している。

A類 ナガラ(継続)、ツツ、テ①(動作の様子)、連用形反復、連用形①(動作の様子:形容詞・形容動詞)等。構成要素の範囲がもっとも限られている。

B類 テ②(継起または並列的な動作・状態)、ナガラ(逆接)、ノデ、ノニ、バ、タラ、ナラ、ト、テモ、テ③(原因・理由)、連用形②(意味はテ③と同じ)、ズ(ズニ)、ナイデ、等。構成要素の範囲がA類より広くなるが、次のC類よりは狭い。

C類 ガ、カラ、ケレド、シ、テ④(その他)等。構成要素の範囲がもっとも広い。

A類・B類・C類は従属句(接続助詞)に注目し、南(1974)はA段階・B段階・C段階の言葉も使っている。ただし、レベルごとに分類すると、D段階もある。D段階のかかり成分とは、応答詞、文頭の接続詞、感動詞、挿入句などのことである。

## 2.2 山口佳也の「読点の打ち方の理論」(2005)

佐竹(1990)の読点の打つ12の基準によると、4番目に「文頭の副詞や副詞的な語句のあと」とし、また6番目に「接続詞や感動詞のあと」とされている。

特に文頭の接続詞の後の読点は、文の構造を明確にするための読点であり、読点が必要であると思われる。

よって、C段階のかかり部分よりも文全体の意味を表わす部分から独立性の高い、D段階のかかり成分の後に読点を打つことを当然とすることには、確かな裏づけがある。

そして、D段階に次いで主文からの独立性が高いC段階のかかり成分のあとに読点を打つのであるが、その後、必要に応じてC段階のものからB段階、さらにA段階のものへと読点を打つべき箇所を移行させるべきであるという。このことは、南(1974)の理論上における「C類のものは、B類の従属句の一部になりにくい」ことに基づいている。

山口(2005)は基本的にD→C→B→Aの順序で読点を打つべき従属句の末尾を選んでいくわけであるが、同じ種類の従属句がある一つの文に並列している場合は、十分に場所を選んで打つべきであると述べている。

## 2.3 読点の使い方

一般的な国語の表記法の基準としては、文部省教科書局調査課国語調査室(1946)が次のような基準案を示している。

一、テンは、第一の原則として文の中止にうつ。

- 二、終止の形をとつてみても、その文意が続く場合にはテンをうつ。
- 三、テンは、第二の原則として、副詞的語句の前後にうつ。
- 四、形容詞的語句が重なる場合にも、前項の原則に準じてテンをうつ。
- 五、右の場合、第一の形容詞的語句の下だけにうつてよいことがある。
- 六、語なり、意味なりが附着して、読み誤る恐れがある場合にうつ。
- 七、テンは読みの間をあらはす。  
提示した語の下にうつ。
- 八、ナカテンと同じ役目に用ひるが、特にテンでなくては、かへつて読み誤り易い場合がある。
- 十、對話または引用文のカギの前にうつ。
- 十一、對話または引用文の後を「と」で受けて、その下にテンをうつのに二つの場合がある。  
「といて、」「と思つて、」などの「と」にはうたない。「と、花子さんは」といふやうに、その「と」の下に主格や、または他の語が来る場合にはうつのである。
- 十二、並列の「と」「も」をともなつて主語が重なる場合には原則としてうつが、必要でない限りは省略する。
- 十三、数字の位取りにうつ。  
しかし、現状は、この基準に一致しない文章や別の基準に従つて読点が打たれた文章も数多く見受けられるのである。このような現状は、外国人が読点の打ち方を理解する上で、一つの障害なつていふと考へられる。  
読点に関する基準案は、佐竹(1990)などがある。佐竹(1990)の分類は、次のようなものである。
- ① 文の主題を示すあと。
  - ② 文の中止するところや、並立の関係にある語句の間。
  - ③ 限定を加えたり、条件や理由をあげたりする語句のあと。
  - ④ 文頭の副詞や副詞的な語句のあと。
  - ⑤ 語句を隔てて修飾する場合、その修飾語のあと。
  - ⑥ 接続詞や感動詞のあと。
  - ⑦ 提示した語のあと。
  - ⑧ 誤解を避けるために必要なところ。

- ⑨ 主部を文の途中においたとき、主部の前。
- ⑩ 助詞を省略したところ。
- ⑪ 文の成分を倒置したとき、倒置部分の前。
- ⑫ 息の切れ目や、読みの間の部分。

### 3. 読点の実験考証

#### 3.1 研究の目的

日本語非母語話者にとって、適切な読点の打ち方を習得することは必ずしも容易ではないのであるが、それを習得するためには、まず日本人の読点使用の傾向を明らかにする必要があるかと思われる。

そこで本稿では、日本人がどのようなところに読点を打つか、その傾向について考えることにする。具体的には、アンケートの調査結果に基づいて、読点使用と性別や年齢別との間には関連性があるのかという点について考察を加える。

#### 3.2 調査実施日と調査対象者

2011年9月～2012年5月に調査を実施。3種類の課題文を提示して、それに自由に読点を打ってもらうという形式で行なった。

調査対象は10歳から80歳までの日本人202人（男性99人、女性103人）で、それを年代ごとに7つのグループに分類した。

詳細は次のとおりである。

表2 対象者のプロフィール

性別	年齢							合計
	① ～19	② 20～29	③ 30～39	④ 40～49	⑤ 50～59	⑥ 60～69	⑦ 70～	
女	25	15	17	15	10	11	10	103
男	27	15	12	18	7	12	8	99
合計	52	30	29	33	17	23	18	202

#### 3.3 調査方法

南（1974）の分類「A類（ながら）・B類（ので）・C類（が・けど）」を踏まえて、課題文に語順を変えて工夫した。語順を変えても、山口の理論に当てはまるのかを調べたい。課題文1-3は次のとおりである。

## 課題文1 「C類-A類-B類」(45文字)

期末試験が来週に迫っているのは分かっていたがお菓子を食べながらテ

C類A類

レビを見ていたので母に怒られた。

B類

## 課題文2 「A類-C類-B類」(49文字)

携帯電話で話をしながら運転するのは危ないと知っていたけれど緊急の

A類C類

連絡だったので仕方なく電話に出た。

B類

## 課題文3 「B類-C類-A類」(43文字)

このレストランは禁煙なのでタバコは禁止しているが彼はタバコを吸い

B類C類

ながら食事をしていた。

A類

## 4. 調査結果

## 4.1 性別・年齢別と読点数

課題文ごとの性別・年齢別と読点使用数との関連性を示すと次のとおりである。

表3 読点数と性別・年齢別(課題文1)

性別	読点数	年齢別の人数							合計
		～19歳	20歳～29歳	30歳～39歳	40歳～49歳	50歳～59歳	60歳～69歳	70歳～	
女	1	4 (3.9%)	9 (8.7%)	8 (7.8%)	5 (4.9%)	2 (1.9%)	1 (1%)	6 (5.8%)	35 (34%)
	2	14 (13.6%)	4 (3.9%)	7 (6.8%)	9 (8.7%)	7 (6.8%)	10 (9.7%)	3 (2.9%)	54 (52.4%)
	3	5(4.9%)	2 (1.9%)	1 (1%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (8.7%)
	4	1(1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	1 (1%)	3 (2.9%)
	5	1(1%)	0 (0%)	1(1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1.9%)
合計		25 (24.3%)	15 (14.6%)	17 (16.5%)	15 (14.6%)	10 (9.7%)	11 (10.7%)	10 (9.7%)	103 (100%)
男	0	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	3 (3%)
	1	3 (3%)	9 (9.1%)	8 (8.1%)	7 (7.1%)	4 (4%)	4 (4%)	2 (2%)	37 (37.4%)
	2	14 (14.1%)	5 (5.1%)	3 (3%)	9 (9.1%)	3 (3%)	8 (8%)	2 (3%)	45 (45.5%)
	3	6 (6.1%)	1 (1%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1%)	10 (10.1%)
	4	4 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	5 (5.1%)

表 3 を見ると、対象とする 202 人の日本人は、45 文字を含む文に 2 箇所読点を打たれている人が多いと見られる。女性は 54 人 (52.4%)、男性は 45 人 (45.5%) である。読点を 3 箇所以上に打たれた人は 10 代が多く、女性の場合、52 人のうち、17 人 (32.7%) である。

表 4 読点数と性別・年齢別 (課題文 2)

性別	読点数	年齢別の人数							合計
		～19歳	20歳～29歳	30歳～39歳	40歳～49歳	50歳～59歳	60歳～69歳	70歳～	
女	0	2 (1.9%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1.9%)	0 (0%)	5 (4.9%)
	1	7 (6.8%)	9 (8.7%)	10 (9.7%)	6 (5.8%)	3 (2.9%)	4 (3.9%)	3 (2.9%)	42 (40.8%)
	2	6 (5.8%)	5 (4.9%)	4 (3.9%)	7 (6.8%)	2 (1.9%)	4 (3.9%)	4 (3.9%)	32 (31.1%)
	3	8 (7.8%)	0 (0%)	2 (1.9%)	2 (1.9%)	3 (2.9%)	1 (1%)	3(2.9%)	19 (18.4%)
	4	2 (1.9%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1.9%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (3.9%)
	6	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
合計		25 (24.3%)	15 (14.6%)	17 (16.5%)	15 (14.6%)	10 (9.7%)	11 (10.7%)	10 (9.7%)	103 (100%)
男	0	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	2 (2%)
	1	4 (4%)	10 (10.1%)	9 (9.1%)	7 (7.1%)	5 (5.1%)	5 (5.1%)	3 (3%)	43 (43.4%)
	2	14 (14.1%)	3 (3%)	2 (2%)	8 (8.1%)	2 (2%)	5 (5.1%)	1 (1%)	35 (35.4%)
	3	8 (8.1%)	2 (2%)	0 (0%)	3 (3%)	0 (0%)	1 (1%)	2 (2%)	16 (16.2%)
	4	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	1 (1%)	3 (3%)
合計		27 (27.3%)	15 (15.2%)	12 (12.1%)	18 (18.2%)	7 (7.1%)	12 (12.1%)	8 (8.1%)	99 (100%)

表 5 を見ると、全対象者 202 人のうち、日本人は、49 文字を含む文に 1 箇所に読点が打たれている人が多い。女性は 42 人 (40.8%)、男性は 43 人 (43.4%) である。読点を 3 箇所以上に打たれた人は 10 代が多く、52 人のうち、19 人 (36.5%)

であることがわかる。

表 5 読点数と性別・年齢別（課題文 3）

性別	読点数	年齢別の人数							合計
		～19歳	20歳～29歳	30歳～39歳	40歳～49歳	50歳～59歳	60歳～69歳	70歳～	
女	0	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
	1	6 (5.8%)	7 (6.8%)	7 (6.8%)	4 (3.9%)	4 (3.9%)	7 (6.8%)	7 (6.8%)	42 (40.8%)
	2	12 (11.7%)	4 (3.9%)	8 (7.8%)	9 (8.7%)	2 (1.9%)	2 (1.9%)	3 (2.9%)	40 (34.3%)
	3	5 (4.9%)	1 (1%)	2 (1.9%)	1 (1%)	3 (2.9%)	2 (1.9%)	0 (0%)	15 (14.6%)
	4	2 (1.9%)	2 (1.9%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (3.9%)
	6	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
	合計	25 (24.3%)	15 (14.6%)	17 (16.5%)	15 (14.6%)	10 (9.7%)	11 (10.7%)	10 (9.7%)	103 (100%)
男	0	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	2 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (3%)
	1	5 (5.1%)	7 (7.1%)	8 (8.1%)	4 (4%)	2 (2%)	4 (4%)	4 (4%)	34 (34.3%)
	2	12 (12.1%)	6 (6.1%)	3 (3%)	10 (10.1%)	3 (3%)	7 (7.1%)	3 (3%)	44 (44.4%)
	3	7 (7.1%)	2 (2%)	0 (0%)	2 (2%)	2 (2%)	1 (1%)	1 (1%)	15 (15.2%)
	4	3 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (3%)
合計	27 (27.3%)	15 (15.2%)	12 (12.1%)	18 (18.2%)	7 (7.1%)	12 (12.1%)	8 (8.1%)	99 (100%)	

表 5 を見ると、202 人の対象者のうち、日本人は、43 文字を含む文に 2 箇所読点を打った。女性は 40 人 (34.3%)、男性は 44 人 (44.4%) である。読点を 3 箇所以上に打たれた人は 10 代が多く、52 人のうち、17 人 (32.7%) である。

以上の 3～5 の表を見ると、読点の数は、最低 0 個から最高 6 までと幅があった。打たれた読点の数に違いがあるかどうかを見るため、独立性の検定で読点の数の分散を調べた。

仮説  $H_0$  は読点数と性別・年齢別の間には関連がない。結果は以下の通りである。

性別の場合、課題文 1 では、検定統計量  $= 3.42 < X^2 (5 : 0.05) = 11.1$  なので、検定統計量は棄却域に含まれない。

つまり、課題文 1 の仮説  $H_0$  は棄てられないので、性別と読点数の間に関連があるとは言えない。課題文 2・課題文 3 にも関連があることは言えないことがわかった。

逆に年齢別から見ると、検定統計量  $= 59.64 > X^2 (30 : 0.05) = 43.77$  なので、検定統計量は棄却域に含まれる。つまり、課題文 1 の仮説  $H_0$  は棄てられるので、年齢別と読点数の間に関連があることがわかった。他の課題文もその言い方で言える。



次に、仮説H<sub>0</sub> は読点数と課題文の間には関連がない。課題文と読点数の関連を見たら、検定統計量=91.7 > X<sup>2</sup> (12 : 0.05) =21 なので、検定統計量は棄却域に含まれる。つまり、仮説H<sub>0</sub> は棄てられるので、年齢別と読点数の間に関連があることがわかった。

### 4.3 読点の位置

課題文中、8箇所読点が打たれている。回答者が読点を打つと答えた箇所の性別ごとの人数を示す。

#### 課題1「C類-A類-B類」

期末試験が①「女：11人(2.98%)、男：12人(3.25%)」来週に②「女：1人(0.27%)、男：0人(0%)」迫っているのは③「女：6人(1.63%)、男：6人(1.63%)」分かっていたが④「女：99人(26.82%)、男：93人(25.2%)」お菓子を食べながら⑤「女：10人(2.71%)、男：11人(2.98%)」テレビを⑥「女：1人(0.27%)、0人(0%)」見ていたので⑦「女：65人(17.62%)、男：53人(14.37%)」母に⑧「女：0人(0%)、男：1人(0.27%)」怒られた。

課題文1による調査の結果について、読点の打たれた位置を分類して、それぞれの割合を示すと次のようになる。

助詞の後「が」	6.23%
副詞の後「週末に」	0.27%
主題の後「は」	3.26%
C類の後「が」	52.02%
A類の後「ながら」	5.69%
助詞の後「を」	0.27%
B類の後「ので」	31.99%
助詞の後「に」	0.27%

この場合、202人のうちの52.02%が、④C類「が」の後に読点を打っている。次に31.99%人が、⑦B類「ので」の後に読点を打っている。この「ので」はB類である。この⑤「ながら」はA類であり、④のC類「が」・⑦B類「ので」よりも従属度が高いので、この結果は山口の述べているとおりである。これは、山口(2004)が、読点の打ち方は、D→C→B→Aの形で、従属度が低い従属句の後

に打たれやすいと述べていることと一致している。しかし、複雑な文の場合、B類よりもまずC類の従属度が低い従属句の後に読点が打たれると山口は述べている。しかし、「主題（は）」はC段階に含まれ、課題文1の中で、読点を打っている人がより少ない。

山口（2005）では、読点が打たれる傾向をC類>B類>A類としているが、課題文1に見える19のパターンの中のパターン「が、ながら（C類、A類）」などは、山口の理論に当てはまらないことになる。従って、南の理論を応用した山口の理論については、この点が問題となる。

文部省案(1946)の中では、文部省案(1946)では、「文の主題を示すあと」に読点を打つとあったが、今回の調査結果では、主題の後には接続助詞（特に、C類「が」B類「ので」）と比較すると、読点を打っている人が少ない。つまり、本稿の調査結果ではC類とB類は主題より読点を優先していると言える。

#### 4.2 課題文2の分析

課題文中、8箇所に読点が打たれている。回答者が読点を打つと答えた箇所の性別ごとの人数を示す。

##### 課題文2「A類-C類-B類」

携帯電話で①「女：12人（3.35%）、男：9人（2.51%）」話をしながら②「女：5人（1.4%）、男：10人（2.79%）」運転するのは③「女：17人（4.75%）、男：15人（4.2%）」危ない④「女：1人（0.27%）、男：4人（1.11%）」と⑤「女：2人（0.56%）、男：5人（1.4%）」知っていたけれど⑥「女：96人（26.82%）、男：94人（26.26%）」緊急の連絡だったので⑦「女：51人（14.3%）、男：34人（9.5%）」仕方がなく⑧「女：1人（0.27%）、男：2人（0.56%）」電話に出た。

課題文2による調査の結果について、読点の打たれた位置を分類して、それぞれの割合を示すと次のようになる。

手段の後「で」	5.86%
A類の後「ながら」	4.19%
主題の後「のは」	8.95%
引用「と」の前	1.38%

引用の後「と」	1.96%
C類の後「けれど」	53.08%
B類の後「ので」	23.8%
形容詞「なく」	0.83%

調査対象の計 202 人のうち、190 人 (53.08%) が C 類「けれど」の後に読点を打っている。次に B 類「ので」の後に読点を打つ人が 85 人 (23.8%) 見られる。この場合、⑥の C 類「けれど」は、⑦の B 類「ので」よりも前節への独立性が高いので、⑥の C 類「けれど」の後に読点を打つと答えた人の割合が、⑦の B 類「ので」の後に読点を打つと答えた人よりも圧倒的に多い結果には納得できる。課題文 2 による調査結果についても、独立性の高い従属句の後には読点が打たれやすいという山口 (2005) の指摘に一致していることがわかる。

課題文 2 による調査結果については、読点の打ち方に 23 のパターンがあることが分かる。そのうち、パターン「けれど」に読点を打った例が多く見られる。

この課題文中において独立性がより高い。③この結果の数値の差には納得が出来る。

次にパターン「けれど、ので」が多く見られる。つまり、C 類「が」・B 類「ので」の後には読点が打たれやすいことがわかった。

### 4.3 課題文 3 の分析

課題文中、7 箇所読点が打たれている。回答者が読点を打つと答えた箇所の性別ごとの人数を示す。

#### 課題文 3 「B 類-C 類-A 類」

このレストランは①「女：16 人 (4.39%)、男：20 人 (5.49%)」禁煙なので②「女：50 人 (13.74%)、男：47 人 (12.91%)」タバコは③「女：1 人 (0.27%)、男：1 人 (0.27%)」禁止しているが④「女：96 人 (26.37%)、男：86 人 (23.63%)」彼は⑤「女：5 人 (1.37%)、男：5 人 (1.37%)」タバコを⑥「女：0 人 (0%)、男：1 人 (0.27%)」吸いながら⑦「女：17 人 (4.7%)、男：19 人 (5.22%)」食事をしていた。

課題文 3 による調査の結果について、読点の打たれた位置を分類して、それぞれの割合を示すと次のようになる。

主題の後	9.88%
B類「ので」の後	26.65%
助詞の後「は」	0.54%
C類「が」	50%
助詞の後「は」	2.74%
助詞の後「を」	0.27%
A類の後「ながら」	9.92%

例文 3 では、202 人中、50%が③C類「が」の後に読点を打っている。次にB類「ので」の後に読点を打つ人が 26.65%見られる。課題文 3 でも山口 (2004) が示しているとおりに、独立性が高い従属句 (南のC類・B類) の後には読点を打ちやすいということが当てはまる。

課題文 3 では、読点の打ち方は 23 パターンがあり、パターン「が」の箇所に読点を打った例が多く見られる。次にパターン「ので、が」の例が多く見られる。つまり、接続助詞「が」「ので」の後には読点が打たれやすいということである。

「ので」の後に読点を打たずに、「ながら」の後に読点を打つパターンもある。これは山口が言う、読点の打ち方は、従属度が低い従属句の後に打たれ易い、ということには当てはまらない。この場合はタバコを吸う行為と食事をする行為とを分けて述べようという意識があったからであろう。

## 5. まとめ

本研究では、読点数は性別・年齢別と関連性があるかどうか調べた結果、性別に注目すると、性別との間には関連があるとは言えない。しかし、年齢別との間には関連があることがわかった。

また、課題文と読点数との間に関連があることもわかった。

10 代の人々の読点の使用頻度が 20 代以降の人々のそれに比べてより高いのは、文の構造というよりも、息継ぎや読みの中で読点を打つ位置を決めるという傾向にあることが要因となっていると考えられる。つまり、文章を作成する際、聞き手・読み手の年齢を考えるべきである。

読点の打たれる位置については、独立性が高い従属句 (C類「が」・「けれど」) の後が最も多く、これは山口 (2005) の指摘に一致するものである。次いで、「が、

ので」(C類—B類)の後に多い。C類とB類との関係については、おおよその傾向として、C類の次いでB類の後に読点の打たれることが多いと言える。しかしながら、山口(2005)に一致しないような例もある。すなわち、読点が、パターン「が、ながら」やC類「が」の後には打たれずに、「ので」の後だけに打たれるパターンなどである。これは、読点を打つ位置を、佐竹(1990)の⑫にある「息の切れ目や、読みの間の部分」で決めているものと考えられる。

## 6. おわりに

読点使用については、それを文の構造との関係のみから考察するのでは不十分である。なぜならば、読点の打ち方は、文の長さ、息継ぎ、強調などの幾つかの要素が絡み合って多様に変化するからである。本稿の考察の結果は、このことを如実に示すものと思われる。

この結果が、どの時代においても通ずるものであるのかといったことなどについては、今回、考察の対象としなかった。今後は、そうした点を明らかにするために、年代別の違いによって見られる読点の打ち方について、各時代の文学作品や新聞・雑誌などを調査対象とした考察を進めて行く必要があるだろう。

## 参考文献

- (1) 石黒圭 (2007)『よくわかる文章表現の技術 I—表現・表記編—』明治書院
- (2) 岩畑貴弘(1999)「文の構造から見た日本語の読点」『中央学院大学人間・自然主論集』第10号、55-57
- (3) \_\_\_\_\_(2002)「読点数の文章間差異についての一考察」『国士館大学教養論集(52)』37-50
- (4) 加藤千恵子、村貞夫(2003)『Excel でやさしく学ぶアンケート処理』東京図書
- (5) 小林伊智郎 (2004)「初級日本語における読点の打ち方について」『拓殖大学日本語紀要』14、69-77.
- (6) 佐竹秀雄 (1990)「読点の打ち方—実例分析(文章作法便覧——すぐ役に立つ文章の書き方早分かり!)——(技法焦点)」『国文学解釈と教材研究』第35巻15号、73-77.
- (7) 佐藤政光 (2003)「日本語の読点について—規則の再検討—」『明治大学教養論集』331号、1-18.
- (8) 日本語教育学会 2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- (9) 杉本つとむ(1967)「句読法の歴史的考察—江戸時代の文学作品を中心に—」『武蔵野女子大学紀要』2 武蔵野女子大学文学学会〔編〕11-26
- (10) \_\_\_\_\_(1998)「句読法の史的考察」『日本文字史の研究』八坂書房 373-423
- (11) 千々岩弘一(1993)『句読点』指導に関する研究(1)」、単著、『国語科教育研究論叢』創刊号
- (12) 飛田良文、佐藤武義 (2002)「西洋語表記の日本語表記への影響」『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』明治書院
- (13) 広田栄太郎 (1959)『用字の技術』東京堂
- (14) 深瀬明子 (2004)「読点の打ち方に個人差を生じさせている要因について」『山形大学日本語教育論集』6 山形大学教育学部日本語教育研究室 45-63
- (15) 本多勝一 (1988)「読点の統辞論日本語のテンについての構文上の考察」『大人類学』19-3 京都大学人類学研究会 48-67
- (16) 円山万治(2001)『日本語革命読点の、正しいうち方』文芸社

- (17) 南不二男 (1974)『現代日本語の文の構造』大修館書店
- (18) 文部省 (1946)『くぎり符號の使ひ方:句讀法(案)』文部省
- (19) 山口佳也 (2005)「構文論と句讀法ーテンの打ち方私案ー」『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要第 36 集』1-10
- (20) Yuniarsih (2010)「現代日本語における読点の研究」『Kagami Jurnal Pendidikan dan Bahasa Jepang』Vol. 1 No.1 Jurusan Pendidikan Bahasa Jepang Fakultas Bahasa dan Seni Universitas Negeri Jakarta